

中村政則と日本の環太平洋史・貫戦史

アンドルー・ゴードン

中村政則教授（以下、敬称略）の歴史研究を振り返るにあたって、私たちの出会いから始めたい。私は博士論文執筆のための調査で日本を訪れたとき、大学院で指導を受ける機会を逸している。その頃、つまり1979年から1980年にかけて、中村は初めてのハーヴァード大学での在外研究中であったからである。思い起こすと、実際に会う前に、すでに私は「大恐慌と農村問題」¹⁾を通して中村の研究に接していた。1982年、駆け出しの助教授として初めて大学院のセミナーの準備をする中で、私はその論文を、同じ講座に収められた、中村の生涯の友人であり研究仲間であった西田美昭の、やや視点の異なる論文²⁾とともに読んだ。当時、私は労働史を研究しており、この二つの論文は、戦前期日本の農村社会経済史研究者の間で繰り返されてきた豊かで魅力的な論争に触れる最初の——そして、きわめて教育的な——きっかけとなった。

その後間もなく面識を得て、30年を超える長い付き合いとなった。中村政則は寛大な友人であり研究仲間であった。日本であれ他のどこの国についてであれ、中村は過去を理解しようとする深い探究心を持ち、それは周囲の人々にも影響を与えた。中村の世界史・比較史への幅広い関心から、私は大いに啓発される場所があった。あるとき、中村が「帝政ロシアの農村社会についての本を読み、日本の地主についての考えを改めた、抑圧の程度では最悪というより中くらのほうへ近づけないといけなかな」と語ったのを覚えている。研究仲間たちは「中村は変節した」と思ったようだとおどけていたが、実際にはほんのわずかな変化にすぎなかった。史料を丹念に読み込み、歴史解釈を引き出す能力は見事なもので、私は方法論と問題意識双方への注意を常に心がける中村の姿勢から多くを学んだ。

中村政則は、ハーヴァード大学での最初の在外研究によって、英語圏、とりわけ米国における日本史研究を知る機会を得た。世界中の若い研究者の成果や歴史研究の新しい潮流への関心は果てることがなかった。私と会うといつも、雑談などせず、中村は開口一番、「あなたの研究仲間や学生で、何か新しいことはありませんか」と尋ねるのであった。それ以来、中村は英語圏の多くの歴史家の研究に対して大いに敬意を払い、幅広く目を通すようになった。たしかに方法や解釈については批判的ではあったかもしれないが、米国や英語圏全体のわれわれのような研究者を、同じ水準で共通の課題に取り組む研究仲間であると見ていた。『歴史としての戦後日本』日本語版への「監訳者あとがき」で、中村は「1980年以降、『日本史研究は日本人がやるもの』という通念は完全に覆されたと思うようになった」と述べている³⁾。もっとも、以前から多くの米国の歴史家が同水準の研究成果を生み出しており、これは私たちより上の世代にはとても正確な評価とは言えない。しかし、英語圏の日本史研究の量と質の向上についての全般的な評価としては当たっているように思われる。この「監訳者あとがき」や他の論考で、中村は米国の歴史家の研究を、イデオロギーもしくは解釈の立ち位置とともに、世代を基準に整理している。私との対談においては、1970年代から1980年代にかけて社会史への変化が起きたことに注目し、米国の日本史研究が、階級だけでなくジェンダーやエスニシティや帝国にも注目し、視野を広げつつあることを歓迎していた。しかし、加速度的に強まりつつあるもっとも重要な傾向として見ていたのは、近代化（モダンゼーション）のプロセスから近代性（モダンティ）の出現へという、日本近代史研究の大きな枠組みの変化であった⁴⁾。

中村政則はときどき、英語圏の研究者によるものであれ日本の研究者によるものであれ、日本史研究における文化論的転回に困惑したり怒ったりしていた。2000年代初め、新宿の喫茶店で話していたとき、「コロンビア大学に犬の歴史を研究している学生がいる、別の学生は動物園について書いている、という話を聞きました。いったいどういうことでしょう」とこぼしたのを覚えている。そのとき、私はこうした研究についてあまり知らず、たいして重要なものとも思わなかった。後にその内容と文化研究や環境史における位置づけを詳しく知り、そうした研究の重要性を認識するようになった(ちなみに、動物園についての本を書いたイアン・ミラーは、いまハーヴァード大学の同僚となっている)⁵⁾。中村もそれらの研究をかなりの程度まで評価するようになったと信じる。そして、「近代化ではなくモダニティに変わったという背後には、ヨーロッパ中心史観の克服、西洋近代の相対化という問題意識もある」との考えを持ち続けていたにちがいない⁶⁾。しかし、この対談で、ハリー・ハルトゥニアンなどの歴史家とも重なり合う視点から、モダニティへの研究テーマの変化は世界で同時並行的に起きている現象であると語っているとしても、中村は、より古いマルクス主義の伝統を受け継ぐ社会経済史家としての自らの立場を、明確に、しかも喜んで自覚していた。しばしば冗談で自分は最後の講座派だと語っていたが、その当否は他の研究者の判断にお任せする。私が刮目すべきことで、今なお重要であり続けていると考えるのは、さまざまな方法論と視点をもつ歴史家と、批判的であると同時に、学べるものを求めて関わり続けたいという中村の意欲である。

中村政則が海外の歴史家の研究に深い関心を寄せるようになったことを自然の成り行きと考えるのは誤りであろう。多くの自国史研究者(米国史を専門とする多くの米国の歴史家を含め)は、外国での研究にほとんど注意を払わない。また、どこの国の研究者がどこへ出かけようと、客員教授というものは、本務の大学の日常業務から解放されたことを喜び、たいてい自分自身の研究や執筆に没頭する。たしかに、中村もハーヴァード大学では常に自分自身のさまざまな研究に取り組んでいた。しかし、できる限

り多くの研究者や学生に会い、それらの人々の研究から学ぼうと努めていたのであった。

中村政則と私が抱いたもつとも重要な概念規定をめぐる関心は「貫戦史」(transwar history)であった。『世界』の対談からも分かるとおり、二人の考え方は異なっており、結局、第二次世界大戦をまたぐ継続性を重視するか、変化を重視するかという問題に行き着く。中村は、戦前に始まり戦後も続いた経済への国家の関与や中産階級文化の登場といった、私が「貫戦」的な条件と見る継続性が存在することを認めつつ、戦後を新たな出発の時期として強調する(これは、多くの日本の歴史家に共通すると思われる)。「戦前とは専制であり、戦争であり、貧困。戦後は、反戦、平和、民主主義、貧困からの脱出」と言うのである。そして、日本の「戦後」は異例に長いというキャロル・グラックの考えを引き、日本の戦後の二重構造という、必然的に導かれる捉え方を提唱した。すなわち、沖縄返還、オイルショック、日本の先進国首脳会議(サミット)参加とともに1970年代に終わった戦後と、戦時下の過去に対する日本の責任を受け入れる努力が実現するまで続く戦後である⁷⁾。

2005年の著作『戦後史』において、中村政則はいつもの理詰めのやり方で自身の「貫戦史」概念に磨きをかけた。貫戦史という概念は戦前・戦後の連続性を強調するとしつつ、断絶か連続かという二者択一的な考え方に対する違和感を表明する。中村にとって、歴史家の仕事は断絶と連続の混じり合いやバランスを分析することであった。中村は、山之内靖やその共同研究者たちが主張したような、「総力戦」としての第一次世界大戦に始まるそれであれ、野口悠紀雄が主張したような第二次世界大戦に始まるそれであれ、明確に連続性を認めていたが、結局のところ、戦後の変化こそがより重要であると感じていた、と私は確信する。本書において、2003年に提示した二重構造としての戦後という定式に新しい層を追加し、戦後改革を三つの層、すなわちプレモダン、モダン、ポストモダンの三層構造として把握することを提起した⁸⁾。

中村政則は、歴史について違う見方をする研究者との論争を好んだ。西田美昭との論争は、日本国内

で実りある成果を生んだ好例である。米国の歴史家リチャード・スメサーストが中村と西田の両方を相手にした激しい論争の方は、たしかにあまり有意義な結果にはつながらなかった。私の考えは、アン・ワズウォーや中村と同じである。すなわち、スメサーストは日本でそれまでの世代、とりわけ中村と西田が生み出した豊かな研究成果に対し、公平さを欠いていた⁹⁾。スメサーストは、中村の研究をイデオロギーのバイアスがかかったものとして、見るも無残に戯画化し、結局、小作農の市場経済との関わりが正しく捉えられていないと批判した。また、中村と西田の意見の食い違いを誇張し、小作制の商業的側面をめぐる二人の相対的な差異を純然たる二項対立にしてしまった。幸いなことに、ワズウォーが自身の研究、なかでも『ケンブリッジ版 日本史』(Cambridge History of Japan) 第6巻所収の長い論文において、農民の市場との関わりや地主および小作人と国家の関係について新たな知見を提供した、1970年代から1980年代を中心とする日本の研究者の成果を詳細に検討してくれている¹⁰⁾。中村は『歴史学研究』にスメサーストの著書について厳しい批判を発表したが、その後、スメサーストが同誌に反論を掲載する機会を得られるよう力を尽くした¹¹⁾。両者の名誉のために付け加えれば、互いの見解は鋭く対立していたにもかかわらず、二人は長く厚い友情で結ばれていた。中村の最後の米国訪問となったのは、2011年にピッツバーグ大学で開催された、日本によるアジア太平洋戦争開始の理由を再検討するための会議であったが、その会議はスメサーストが組織したものであった。

海外の研究者への中村政則の影響を評価するのは難しい。中村の研究はワズウォーに大きな影響を与えているし、スメサーストが異なるアプローチをとったのも中村の研究を意識してであった。明治期の女工に関するパトリシア・ツルミの研究に解釈の枠組みを提供し、徳川時代の農民反乱に関するハーバート・ピックスの研究のきっかけとなったのも中村の研究であった¹²⁾。しかし、中村の専門分野であった農村社会経済史は、20年以上前から人気は低下し、残念ながら彼の主な著作を読む歴史家も米国でほとんどいなくなった。還元論的な一般化という危険を

あえて冒せば、日本の農業史の衰退を招いたのは二つの傾向であると言えよう。グローバル化が今日の研究や政策の焦点として登場したこと、都市が今日の日本の景観を完全に席卷するようになったこと、これである。もちろん、戦前期の経済のグローバル化と日本の農業経済を結びつけることも可能ではあるが、戦前期のグローバル化に関する研究では、一般的に海外に膨張する帝国に焦点が当てられてきており、グローバルな流れを国内の農村に結びつけようとする試みは少ない。そして、都市生活と都市のモダニティの興奮やトラウマが、英語圏(および日本)における日本史研究の主要テーマとなってきたのである。

日本の農村社会・経済の研究を続けた英語圏の少ない研究者への影響以上に、間接的ながら、おそらく英語圏でもっとも大きな衝撃を与えたのは、ベストセラーとなった『労働者と農民』であろう。ミキソ・ハネ(羽根幹三)の著作『農民、反乱、被差別民』¹³⁾は、中村政則の研究に大いに依拠して書かれている。約20年間、ハネの本は広く読まれ、多くの読者が階層や抑圧や抵抗、そして社会の周縁の人々の生活に注目するのに影響を及ぼした。あまりにも『労働者と農民』に依拠していたため、あるとき中村は私に、ハネが自分の本を翻訳しなかったことについて不満を漏らしたほどである。

しかし、私自身、そして他の人々も同様であると想像するが、中村政則から日本近代史だけでなく、歴史研究一般の方法論と解釈の仕方について学んだことを強調しておきたい。二つの例をあげよう。一つは、史料の断片に密着して注意深く読み込むことから、歴史家は重要なことがらを知ることができるという点に関係する。『労働者と農民』の冒頭の数頁で、中村は最初、史料の読み間違いを犯し、その後で史料が何を語っているのかを知ろうと努力したことを述べている。1914年の、表紙に「工男女関係交渉録」と書かれた帳簿で、中村は、それに接した当初、当然ではあるが、製糸工場で働く女工の異性関係の調査記録かと思ったという。それまでの調査の中で、若い女工が男性の上司から、今なら虐待やレイプ、セクシャル・ハラスメントと呼べるようなことをされたり、果ては自殺を図ることさえあった

ことを伝える記事を、諏訪地方の地元新聞で何度も見かけていたからである。しかし、その分厚い帳簿を読み進めていくうちに、思い違いであったことに気づいた。この史料は、諏訪地方の製糸資本家の結社が作成したもので、労働者の争奪をめぐる紛争処理の経過が詳細に記録されていた。中村政則ほどの歴史家であっても史料の読み間違いをすることを知り、良い教訓となった。そして、読み間違いを自ら認めたことは、私の印象に強く残った。しかし、もっと印象深かったのは、「交渉録」に添付されていた断片的な史料から完全な意味を引き出した方法であった。中村が注目したのは、製糸資本家や工場経営者が労働者の争奪や移動を制限しようと力を尽くしていたことではなく、興石けいという若い女工が自らの置かれた立場をよく理解し、身に降りかかるさまざまな制約に抵抗する、執拗で有効な戦略を繰り広げたことであった。それまで私は製糸女工を自己決定能力のない犠牲者としか見ていなかったが、まさに目からウロコが落ちる思いであった¹⁴⁾。

中村政則による歴史研究方法論についての二つ目の教訓は、『日本の近代と民衆——個別史と全体史——』(1984年)¹⁵⁾の中ほどにある「歴史における意図と結果の乖離」と題された短い節から教えられたものである。この節の冒頭には、『労働者と農民』を書いたねらいが述べられている。10年以上におよぶ現地調査や多くの人々からの聞き取りをふまえ、中村は無力な無名の人々に光を当てようとした。そうした無名の人々の中で、特定の時と場所に「火花がおこる」というのである。無名の人々が、社会の変革と自分自身や富も権力もない他の人々の生活の改善をめざし、変革の主体としての行動を起こさせる火花が。中村は、1970年代初め、元小作農で鳥取県農民運動の指導者大山初太郎に出会ったときのことについて述べている。大山は途中で休むことなく4時間も、1920年代から1930年代の自身の経験について語り続けた。中村は、大山の闘いの話を聞いて、感動にうち震えたと書いている。しかし、大山の話や他の人々の同様の話は感情を揺さぶる感動的なものであったとしても、中村は同じ感動や情感とともにそれらの話を単に語り直すこと、すなわち「自己を対象と同一化」することを避けた。そのかわり、

一歩退き、登場人物たちが行動した政治構造、社会構造、経済構造に関する自らの知識を動員し、特定の時と場所において歴史的アクターの頭の中で火花をおこした諸条件を理解することが重要だと感じたのであった。

ここで中村政則は、同じ「火花がおこる」という表現を別の意味で使った色川大吉に異議を唱えている。色川がいう火花は、歴史家が歴史的アクターを研究し、歴史的アクターと同一化するにつれて歴史家の頭の中でおこる。中村は、アクター自身の頭の中でおこる火花について書いている。私が大いに尊敬し学んでいた、同世代を代表する二人の歴史家の間にこのようなアプローチの違いがあることを知ったことは、貴重な教訓となった。

歴史家が歴史的アクターとの関係で立つ位置——および、感情的な結びつき——を決める二つの異なる方法について学んだことに加え、私は構造と主体の関係についての中村政則の定式を興奮して読んだ。中村の関心は、大山の人生と1920年代に彼が農民運動指導者へ変貌したことを構造の中に位置づけ、構造と個人の両方を理解することにあつた。ここでのカギはこの短い節の表題、すなわち「意図と結果の乖離」である。私が理解したところによると歴史的アクターが意図した行動とその結果が乖離しているとき、人はこの乖離を生み出した構造的諸条件を探り出さなければならないと感じるだろう。この場合、大山は、小作料の引き下げと地主に対して小作農民に農地を売るように圧力をかけることによって、小作農民の生活を改善しようとした。しかし、この努力は結果として、「農民の小所有者意識を強め、農民の保守化を招き、農村の戦時体制への移行をやりやすくする前提条件をつくった」のであった。ここでの中村の議論は、私にヘイドン・ホワイトの有名な定式にある、歴史家の喩法としてのアイロニーの重要性についてまたとない教訓を与えてくれた。おびただしい歴史の中心にあるアイロニーは、意図と結果の食い違いである。こうした食い違いに注目するとき、人間の活動を促したり阻止したりする構造的諸条件がわかる。中村にとって、とくにこの事例では、国家を視野の外に置いた「民衆史」が問題と

なる。なぜなら、国家の政策こそが、大山の努力とその意図せざる結果を招いたコンテクストを作り出したのであったのだから。その頃、私自身は工場労働者と経営者、そしていくらか国家に焦点を当てて研究を進めていた。私の米国の研究仲間であったシェルドン・ギャロンとの対話に加え、中村の研究は、国家構造と権力の分析の重要性をいっそう重視する視点を与えてくれたのであった。

本稿を終わるにあたって、再び『労働者と農民』に戻ろう。本書で中村政則が与えた教訓のいくつかは、日本国内であれ海外であれ、日本史をめぐる今日の議論の中で忘れ去られていることは残念である。本書の序文（「女工・坑夫・農民——はじめに——」）と炭鉱労働者の章（「地底の世界」）のいずれでも、中村は1880年代から1890年代の三菱高島炭坑における過酷な労働条件や、三菱の政策に対して炭鉱夫たちがとった行動について詳述している¹⁶⁾。『歴史学研究』の読者ならきつと、2015年、高島を含む「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」のユネスコ世界遺産登録をめぐって、韓国と日本で噴出した厳しい論争を覚えておられるであろう。韓国政府は、日本政府がユネスコへの提案の中で第二次世界大戦中、これらの場所で朝鮮半島から送られた人々の強制的な労働が使われた事実を認めないことに反発した。これらの労働者は劣悪な条件の下に置かれ、数千人が命を落とした。日本政府は、明治時代の工業化の成果の認定を求めているだけで、その後の歴史を議論する必要はないという、やや珍妙な反論を行った。結局、日本側が戦時中、朝鮮半島出身の「労働を強いられた」(forced to work) 人々がいたことを認め、韓国がこれらの場所を世界遺産に登録することを支持することとなった。

私が奇妙に感じたのは、日本の多くの進歩的なコメンテータが戦時中の強制労働は誠実かつ完全に認めるべきであるという点では強い同意を表明していた一方、事実上だれも——少なくとも重要な公論の場では——、政府や各地の観光産業関係者が祝賀しようとしていたその時代の、炭鉱や造船所、製鉄所における労働条件を取り上げなかったことである。たしかに、明治時代の技術や経済の成果には語る価値のある物語が存在する。しかし、そうした成果は、

明らかに多大なコストを要していた。中村政則は、他の研究者とともに、日本の坑夫が置かれていた過酷な労働条件、納屋の親方や炭鉱経営者による搾取に対する執拗な、そしてときには成功を収めることもあった坑夫たちの抵抗の両方について、雄弁に書いている。私が知らないものがあるかもしれないが、ユネスコの世界遺産登録に関連して、政府が祝賀しようとしているまさにその時代の暗黒の側面を提起した本や論文を見たことがない。中村は専門家に向けて研究成果を生み出したが、一般読者向けに書くことにもこだわった。もし論評することができたなら、明治時代の輝かしい成果と戦時期の残虐性と悲劇という単純な二分法として組み立てられた歴史に対し、真っ先に異義を申し立てたに違いない。

- 1) 中村政則「大恐慌と農村問題」『岩波講座 日本歴史』第19巻、近代6（岩波書店、1976年）135-185頁。
- 2) 西田美昭「農民運動の発展と地主制」『岩波講座 日本歴史』第18巻、近代5（岩波書店、1975年）141-181頁。
- 3) 「監訳者あとがき」アンドルー・ゴードン編、中村政則監訳『歴史としての戦後日本』（みすず書房、2001年）434頁。
- 4) 中村政則、アンドルー・ゴードン「日本の近現代史を再考する——アメリカの日本研究との対話——」『世界』（2003年9月号）125頁。
- 5) Ian J. Miller, *The Nature of the Beasts: Empire and Exhibition at the Tokyo Imperial Zoo*, Berkeley: University of California Press, 2013.
- 6) 前掲「日本の近現代史を再考する」125-127頁。
- 7) 同上、131-132頁。
- 8) 中村政則『戦後史』（岩波書店〔新書〕、2005年）5-7頁。
- 9) Ann Waswo, "Review: Agricultural Development and Tenancy Disputes in Japan, 1870 to 1940. by Richard J. Smethurst" *Monumenta Nipponica* (1987) 42: 3, pp. 364-366.
- 10) Ann Waswo, "The Transformation of Rural Society," in *Cambridge History of Japan, Vol. 6: The Twentieth Century*, Cambridge: Cambridge University Press, 1988, pp. 541-605.
- 11) 中村政則「〔批判と反省〕アメリカにおける最近の地主・小作争議研究の動向——リチャード・スメサーストの批判に答える——」『歴史学研究』579号（1988年4月）38-53頁。リチャード・スメサースト、松成

- 恵訳「日本における農業の発展と小作争議——中村政則氏・西田美昭氏への反論——」『歴史学研究』653号(1993年12月)16-28, 31頁。中村政則の「批判と反省」は最初、英文で発表された。Nakamura Masanori, "The Japanese Landlord System and Tenancy Disputes: A Reply to Richard Smethurst's Criticisms," *Bulletin of Concerned Asian Scholars* 20:1 (January-March, 1988) pp. 36-50.
- 12) Patricia Tsurumi, *Factory Girls: Women in the Thread Mills of Meiji Japan*, Princeton: Princeton University Press, 1990; Herbert Bix, *Peasant Protest in Japan, 1590-1884*, New Haven: Yale University Press, 1986.
- 13) Mikiso Hane, *Peasants, Rebels, and Outcasts: The Underside of Modern Japan*, New York: Pantheon Books, 1982.
- 14) 中村政則『労働者と農民』(小学館, 1976年)16-22頁。
- 15) 中村政則『日本の近代と民衆——個別史と全体史——』(校倉書房, 1984年)86-93頁。
- 16) 前掲『労働者と農民』23-27, 119-129頁。

(22頁より続く)

- in: *Archiv für Sozialgeschichte* 47 (2007), S. 3-29.
- 45) たとえば、井関正久『ドイツを変えた68年運動』白水社, 2005年。
- 46) Axel Schildt, Deutschland seit 1945, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht* 62-11/12 (2011), S. 743.
- 47) 高橋秀寿「「六八年」——ドイツ現代史の転換点か、神話か?」『ゲシヒテ』4 (2011), 66-72頁, 引用は66頁。
- 48) 「特集 ドイツ史のなかの「六八年」」『ゲシヒテ』4, 45-72頁; 特に同特集の高橋, 前掲論文; さらに近年では、内外でグローバルな文脈での位置づけが試みられている。たとえば、ノルベルト・フライ, 下村由一訳『1968年——反乱のグローバリズム——』みすず書房, 2012年 (Norbert Frei, 1968: *Jugendrevolte und globaler Protest*, München 2008); 西田慎・梅崎透編著『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」』ミネルヴァ書房, 2015年。
- 49) 川越修・辻英史編著『社会国家を生きる』法政大学出版局, 2008年, および、辻英史・川越修編『歴史のなかの社会国家』山川出版社, 2016年が扱う時間的な射程を参照。
- 50) 白川, 前掲論文, 43-44頁。
- 51) 板橋拓己『黒いヨーロッパ』吉田書店, 2016年。このなかで、シルトラの西ドイツ社会史研究は、特有の道論の「戦後史版」と位置づけられる(25頁)。
- 52) Kießling/Rieger, Neuorientierung, in: Dies. (Hrsg.) *Mit dem Wandel Leben*, S. 10; たとえば、「西欧化」と「民主化」「自由主義化」について検討したものとして、Philipp Gassert, *Die Bundesrepublik, Europa und der Westen. Zu Verwestlichung, Demokratisierung und einigen komparatistischen Defiziten der zeithistorischen Forschung*, in: Jörg Baberowski/Eckart Conze/Philipp Gassert/Martin Sabrow, *Geschichte ist immer Gegenwart. Vier Thesen zur Zeitgeschichte*, Stuttgart 2001, S. 67-89; また、西ドイツ社会史の主導的研究者による「近代」概念の再検討として、アクセル・シルト, 熊野直樹訳「20世紀ドイツにおける近代の諸問題」『歴史評論』645 (2004年1月), 2-21頁。